

シンポジウム／鬼と山人―『津軽口碑集』を基点として―

## 山人とは誰か

### 花部 英雄

#### 一、『津軽口碑集』の山人

昭和四年に刊行された内田邦彦の『津軽口碑集』に、「種市の対嶋某、山人となる」という一文が載る。

中津軽郡種市（現、弘前市）の対嶋佐治兵衛の兄は、ほんやりした風変わりな人で、人々は「神さま」と呼んで、その父を通して護符を貰ったりする。ただ、求めてもどうしても与えないことがあるが、その時には依頼側の病人は助からないとされる。時折、この神さまのもとにどこからか訪ねてくる者があり、家人は座をはずして表に出る。家から出てきたその客を見るが、たちまちに消えてしまうという。三月と九月の二十九日は、神さまが鬼沢の祭礼に出かけるが、村の人が誘うと後から行くと答えるが、かならず先に着いている。この神様は遊びに出ると一月も帰ってこないこともあるが、今から二十年前の秋、家を出たきりついに帰らず、岩木山の赤倉に衣が脱いであったとい

う。その翌年、対嶋家の苗代田に清泉が湧いたといい、神さまの所為とされ、泉は眼病に効くと評判になりお堂を建てたという。

この話をしてくれた五十歳ぐらいの五所川原の人が、自分が幼い頃に「神さま」は三十歳ぐらいであったといい、神さまは明治三十七、八年頃に姿を隠したという。事実談の記録ではあるが、事実そのものとはいえない。変人でありながら神仙界に通じた「神さま」が、在俗時から赤倉の麓の鬼神社に参拝し、出離後に赤倉の沢に入り「山人」になったというこの話には、「赤倉」や「山人」に寄せる周囲の人々のただならぬ関心が示されているといえよう。

ところで、いったい山人とは何者なのか。山に住む人、山で働く人といった普通の意味でないことはわかるが、果たしてどのような位相にあるものなのか。冒頭で「中津軽郡種市の対嶋佐治兵衛といふ人の兄は山人になれり」と単刀直人に言い切っているが、そのあとで「山人」の説明はない。「山人」という当時の暗黙裏の了解が、現代のわたしたちには伝わらなくなってしまったからかもしれない。ここでは、その「山人」を伝承の文脈からさぐっていくことにする。

#### 二、山人と土木技術者集団

山人という語から柳田國男の「山人先住民族」説を思い浮か

べる人も多いかと思われる。初期の柳田のテーマであった漂泊民研究のキーワードともなる語で、柳田自身「山人の血を遺伝しているかも知れぬ」（『山人外伝資料』）などと述べている。しかし、柳田は「山人」を実体というよりも方法的概念で用いていたようで、すなわち稲作民によって山に追われ、時折里に出没する先住民の汎称としての「山人」である。

しかし、この山人の語は、青森県、秋田県では実体（といっても山の怪異である）を指す名称として用いられていた。殊に白神山地の南側の山本郡藤里町では、山人が山中奥深くや山上にいて、里人と接触したという話などが伝えられている。事例は遡って文化二年（一八〇五）の七月七日、秋田県の森吉町に抜ける雨の山中で道に迷った菅江真澄が、ようやく峰に出て道を見つけたとき、案内の老翁が「いづこの嶺にも山鬼ヤマヒトのみちとて、みねのかよひちはありけるものなり」と語るのを記録している。真澄は「やまひと」に「山鬼」の漢字を当てているが、地域の伝承的意味をくんで「山の鬼」の意で用いたと解釈される。

ところで、白神山地の南麓にあたる藤里町向真名子にある「水無沼」は、山人あるいは鬼平之が造成したと伝えている。満々と水をたたえたこの沼のおかげで、直下の横倉の田んぼはうるおっている。享和二年（一八〇二）にここを訪れた真澄は、「五十とせの近きむかし、平之へいしといふ、いくばくかの力とみたるがありて、ちいさき池なりしを、一夜のほどに、ひとりしてつきと

めてひらきし。」と記している。聞き書きによると思われるが、歴史的にいえばこの水無沼を含む藤琴地区一带は、佐竹藩家老の梅津政景が開拓していった。その経緯については以前記したところであるが、政景は元和二年（一六一六）に藤琴川から用水を十二キロにわたって引き、現在の比井野地区に大きな新田開発を行い、これによって五百石の知行を得ている。その中には「疎水溝」のトンネルも含まれており、大がかりな工事であったことがわかる。梅津一族はこの水無沼の造成以外にも、この地域の開発に深くかかわっている。

おもしろいことは真澄が「平之」と呼んだ人物が、政景が拓いた「比井野」と音が類似していることである。これは偶然というよりも、比井野にいた土木技術者が水無沼の造成にかかわっていたからではないだろうか。政景は家老になる以前、銀山奉行の職にあり、院内銀山の「大水貫」の難工事を完成させている。そのときの技術者たちを比井野開発に用い、そこに住まわせたと考えることができる。鉾山や新田開発にともなうトンネル工事は、専門的な知識や技術を持った人々でなければできないからである。藤里町でいう「山人」と同義の「平之」「鬼平之」の呼称の背景には、そうした技術者集団のかかわりが想定される。

平之（＝山人）の水無沼造成に類似しているのが、青森県弘前市鬼沢の「逆水沢」の工事である。『弘藩明治一統誌』によると、弥十郎という農夫と山人は親しく、山人は弥十郎の開墾の手助

けをしてくれる。しかし水不足に困っていると、山人が一夜のうち水を入れてくれる。水源をたどっていくと、途中に大石を砕いたりして赤倉沢に到る。用水は低いところから高いところへと流れていることから「逆水沢」と呼び、この水路の完成によって村を鬼沢と称した。ところが、弥十郎の妻が山人を不審に思うことから、山人は山に戻ってしまった。開拓に用いた耕具などを置いていったので、それを鬼神社に納めたという。

この逆水沢の記事は、赤倉にある法泉院の縁起にもあり、ここでは「赤倉の鬼」の所業とある。また、文化八年（一一八二）書写の「岩木山縁起」<sup>3</sup>にも同様の記事があり、ここでは「木客」と記し、村人は木客を鬼神社の神に祀ったとある。菅江真澄も「津可呂の奥」（一七九六）に、鬼神の祠、逆水のことを記している。

現在、鬼神社に鍬などの耕具や道具類の奉納額がかかっているし、逆水溝は今もあり、実際機能している。これらの諸書にみえる説話的言説は、ある歴史的事実に基づいていることは確かかなようである。しかし、事実がベールに包まれていてはつきりしない。それは前に述べた秋田県藤里の水無沼の造成も同様で、いずれも困難をともなう大規模な工事で、高度で専門的な知識、技術をもった技術者集団によって行われたはずである。それを「山人の一夜事業」といった伝説の言葉で表現しているところに、両者が同一の伝承基盤にあることを示しているが、その先がよく見えない。

### 三、鬼神社伝説の背景

民俗学者の内藤正敏に、鬼神社について金属民俗学の視点からとらえた論文がある。鬼神社から七キロ北西に本宮となる巖鬼山神社（西方寺観音院）<sup>4</sup>があり、鬼神社はもともとここから遷座したとされる。その巖鬼山神社は百沢にある表の岩木山信仰に対し、「征服された鬼が棲む」裏の岩木山信仰をもっているという。

この系統を引く鬼神社では、旧の正月二十九日に「七日堂祭」の行事を行っている。その内容は、御神火行事、御柳行事、御宝印行事、三拍子行事、臼鍋餅行事などの神事である。このうち御柳神事に用いられる柳の木は、もとは「鬼神塚」（逆水溝の別称）から伐ってくるものだといひ、「柳は鬼神の神霊が宿る神木なのである。」と伝えられている。また、作占にかかわる三拍子行事に使われる太刀、平鍬、三本鍬、鎌は、この神社の本体が鉄とかかわりをもっていることを示しているという。そして、鬼神社の御神体は鉄の平鍬であることも明らかにされる。

また、本社のある巖鬼山神社のある十腰内村には鬼伝説がある。鬼神太夫と呼ばれる刀鍛冶が十振の刀を打ち出したところ、そのうちの一本が杉の樹上に飛んでいったことから十振ないゝ十腰内の地名由来ができたとされる。他にも鬼神が鍛冶師の娘の

婿になろうと、七日間に十振の刀を打つが、怖れた鍛冶師が一振隠したために、十腰ないと言って鬼神は赤倉に立ち去ったという。この鬼の刀鍛冶伝説は「岩木山の古層の信仰」を示すものとして、「かつて修験道がもっていた一面を伝えている」と、内藤は述べる。鬼と鍛冶、修験のかかわりはこれまでにも説かれてきたことである。<sup>5)</sup>

赤倉辺にあるこうした伝説の根幹には製鉄遺跡がかかわっていると内藤は指摘する。赤倉山麓には八ヶ所の製鉄遺跡が発掘されており、その年代を平安、中世、あるいは江戸の初期といった意見の相違はあるが、鉄を産出していたことはまちがいない。それが鬼神太夫、鬼神社の伝説形成の背景となっており、「岩木山麓に歴史的に実在した金属民のイメージも反映している」とする内藤の見解は興味深い。

さて、鬼神社、赤倉の鬼の伝説を製鉄および修験を視野におく内藤の考えは魅力的ではあるが結論は急ぐまい。それよりもこれが津軽の特殊性であるのかどうかという問題の検討も必要であるが、しかしここではいったん鬼、金属民の問題から離れて、全国的な開発伝承について見ていきたい。山人⇨鬼といった図式を拡大する方向だけでは、却って開発にかかわる実態の追究がおろそかになってしまう危惧があるからである。そこで、先に述べた伝説の水無沼、逆水沢の事業を、神仏あるいは歴史上の人物が山や湖を蹴破って広大な農地などを開発したという「蹴裂伝説」から照射してみることにした。

#### 四、蹴裂伝説と開墾

蹴裂伝説の研究については、昭和四年に雑誌『民族』に載せた中山太郎（饗庭斜丘の筆名で掲載）の「蹴裂傳説より見たる上代の開墾術」以来、閉塞状態にあるといえる。昭和38年に刊行された『神話伝説辞典』に「伝説項目」として取りあげられて以後、主な民俗関係の辞書類から項目が消えてしまい、巨人伝説やダイラボッチに吸収された観がある。国土の創成を説く点では同じといえるが、「大地の土を引き抜き積み上げる」巨人と「山や岩を蹴破る」龍蛇は対照的である。自然の地形を巨人や神の創成として説明する巨人伝説と、広大な農地を人為的な事業の成果として半ば事実のレベルで語る蹴裂伝説とを、伝説生成の差異にかかわる問題として対比的に考えていきたい。

蹴裂伝説は中山が論文で取りあげた事例以外に、『日本伝説大系』全15巻などを参考にすると、次の21例を数えることができる。

- 1 最上川、庄内の開墾 山形県最上郡（阿古耶姫、藤）
- 2 小国郷のはじまり 山形県最上郡最上町小国（大亀）
- 3 村山平野の開墾 山形県山形市村木沢（慈覚大師、蛇）
- 4 最上川黒滝の開墾 山形県白鷹町（西村九左エ門、黒滝明神、御四天王、剣先不動、大蛇）

- 5 信達湖水伝説 福島県福島市（大蛇、大熊）
- 6 赤城山子持山の山隘の切開 群馬県勢多郡、碓氷郡（日本武尊、諏訪明神）
- 7 穴切神社・蹴裂明神 山梨県甲府市、南巨摩郡、西八代郡（地藏菩薩、不動尊）
- 8 甲斐国東八代郡左口村の佐久神の蹴開 山梨県東八代郡（蹴裂明神は佐久神の子）
- 9 松本平・安曇平の開鑿 長野県松本市、上水内郡（泉小太郎、犀）
- 10 越前国坂井郡三国 福井県坂井郡三国町（継体天皇）
- 11 越中国砺波郡別所七山 富山県砺波郡（頼成、龍蛇）
- 12 近江国犬上郡姉川の蹴裂傳説 滋賀県犬上郡（覚然法師、龍王）
- 13 請田・歙山・持籠の三神 京都府亀岡市（請田神社、歙山神社、持籠神社）
- 14 明神岳の大国主命 京都府亀岡市（桑田神社、請田神社、大蛇）
- 15 五社明神の国造り 兵庫県豊岡市（大蛇）
- 16 但馬国城崎郡瀬戸 兵庫県城崎郡（大巳貴、少彦名、異説に出石の神（天日矛））
- 17 馬関海峡の開鑿 山口県下関市（赤目の籠）
- 18 阿蘇明神の蹴裂伝説 熊本県益城郡、山鹿郡（阿蘇大神）
- 19 神功紀九年四月条肥前国松浦郡神田の「裂田溝」 長崎県

#### 松浦郡

- 20 阿蘇の大鯰 熊本県阿蘇郡一の宮町（阿蘇大神、大鯰）
- 21 薩摩国の出水と長島の隼人の追門 鹿児島県出水市（隼人の神）

伝説の概要は、土地の神や著名な人物が、山や岩を砕いて農地や川を開いたとし、その事跡を称えるというものである。その際、地主神との争いの結果、地主神や開鑿者を神仏に祀ることとで平穏を取り戻す。神争いにおける地主神をしばしば水棲の大型動物と形容するのが特徴的である。これは巨人伝説が、大きな体の超人的な主人公が天地の創成にかかわるのに対し、蹴裂伝説は創成がすんだ後の自然を人間の都合のいいように変形する事業を展開しているからといえる。先住する自然神を新興勢力が押しつける構図を、神・精霊の交替といった神話的な形式の表現で示しているといえよう。

具体的な事例を4の「最上川黒滝の開鑿」で示そう。山形県白鷹町高岡の須貝一彦氏によると、昔大蛇の死骸が流れてきて、その尾を祀ったのが高岡の御四天王様で、頭を祀ったのが黒滝神社だという。その黒滝が高い滝であったのを、江戸の豪商が最上川に船を通すために壊したとされる。岩の上に火を焚いて、それに水かけるとパチパチとなつて砕けたという。それによってこちら側に約七ヘクタールの水田ができたが、減反政策で耕作されることなく、葦の原になつていたのを、今は牧草地

にしているという。

須貝氏が話してくれた黒滝の開鑿については、高橋連七が「黒滝の大蛇と西村九左エ門」(『白鷹町のとんとむかしとうびんど』)にまとめている。それによると、大昔、おがまぐらの大蛇と白鷹山の大蛇とが最上川を巡って争いをして、おがまぐらの大蛇が勝ち、川を堰き止めるために横たわったのが黒滝となり、そのため置賜盆地は湖のようであったという。ところで、元禄の初めに上杉様の御用商人の西村九左エ門が一万七千両を投じて黒滝を壊して船運を開いたという。京都の船山間兵衛が多数の技術者を連れてきて工事に取いかかろうとすると大雨になったので、そこで高賢法師が剣先不動を祀って祈祷し、無事難工事を終えたという。

平成六年に白鷹町は黒滝開鑿三百周年ということで西村九左エ門の顕彰碑を建てたというから、史実として伝えられてきたといえる。興味深いのは、おがまぐらの大蛇の頭が化石した黒滝の岩盤の開鑿に「元黒滝梁の付近の滝を龍の剣掘りや焚き火して岩を熱し急に冷水をかける等原始的な方法が用いられた」とする記述である。これは中山太郎が「蹴裂伝説の正体は改めて言ふまでもなく古代の開鑿を意味してゐる」として、続日本紀の称徳帝の条を引いた「時巫覡之徒、動以石崇為言、於是積柴燒之、灌以三十余斛酒、片々破却棄於道路」という部分と同様である。巫覡の徒が、石に柴を積んで燃やし、それに多量の水を注ぎ粉々に砕いたのを、黒滝の開鑿では「京都の船山間兵

衛が多数の技術者を連れて」工事を完成させたのである。黒滝の話の場合、そうした史実にそれ以前の大蛇の争いが重層した形で伝えているところに特色がある。

### おわりに

本稿は『津軽口碑集』に登場する「山人」の正体とは何かを巡り、山人がかかわる開発伝承を分析対象として、秋田県藤里町の水無沼の造成、青森県弘前市の逆水堰の伝承の背景を探ることにした。伝説はオブラートに包まれているが、それは水田開発の史実に基づくものである。開発の主体が山人、鬼といった伝説的な言葉で表象されるのは、伝承を構成する基盤の文化背景によるものと考えられる。内藤正敏によると、岩木山北麓の赤倉沢付近ではかつて製鉄が行われた遺跡が確認されており、修験系の鍛冶師の関与が指摘される。鍛冶を含めた製鉄にかかわる金属民のイメージが、過剰なエネルギーの持ち主を「鬼」と考える土壌にあって、同様に逆水溝の水路を完成させた技術者集団を鬼(山人)とも表象したのである。

ところで、鬼、山人は北奥羽のローカルな伝承といえるが、これを全国レベルの開発伝承へと広げてみると「蹴裂伝説」の系列に位置づけられる。蹴裂伝説は中山太郎が言うように「古代の開鑿」を意味するものである。自然の岩や山を掘削して農地に変える営みは、自然資源を人工的なものにして利用する人